箕

［mi］

箕サミット２０１７の記録

独立行政法人
国立文化財機構
東京文化財研究所

箕づくりの技を伝える

答申

[ver.]

箕サミット2017の記録

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所
編

はじめに

箕（み）は、穀物の選別や物の運搬に使われる民具です。かつては暮らしの現場に欠かせない必需品でしたが、産業構造や生活様式の変化によって需要は激減し、その製作技術も継承の危機にあります。

多くの箕は、フジなどの蔓（つる）性植物や樹木、タケ類など、複数の素材からヒゴを作り、それらを編み組むことで作られます。またそのかたちは、穀物の選別という用途のために洗練された、独特のものです。この複雑な素材とかたちゆえに、箕づくり技術の習得や製作には時間がかかるうえ、籠や笊のように現代生活のなかにそのまま取り入れることが難しいのが現状です。

こうした技術を、どのように生きたまま次世代につないでいけるのか。国では箕づくり技術のうち、秋田県秋田市の太平（おえだら）箕や仙北市角館町の雲然（くもしかり）箕、千葉県匝瑳（そうさ）市の木積（きづみ）箕、富山県氷見市の論田（ろんでん）・熊無（くまなし）の箕の製作技術について、重要無形民俗文化財（民俗技術）に指定しています。こうした枠組みは、技術の重要性を広く知ってもらい、伝承の取り組みを進める後ろ盾とするには大変有効です。

一方で、行政や研究者の取り組みには限界もあります。たとえばこれまでは、技の記録や、箕の「過去」を明らかにする調査・研究に重点がありました。それもとても大切な仕事ですが、後継者や原材料の不足、需要や販路の縮小など、現場がいま直面しているさまざまな課題に対しては、十分な解決策を示すことができません。

そこで、箕づくりの現在や未来に積極的に貢献していくために、箕に関わる多様な方々にお集まりいただき、いろいろな知恵や経験を集めて一緒に方策を考えたい、そのような意図で企画したのが、「箕サミット―編み組み細工を語る」（2017年11月13日開催）でした。

サミットでは国の指定を受けた3件の作り手はもちろん、その他の地域の箕の作り手、竹細工や籠などの作り手、売り手、使い手、愛好家、デザイナー、研究者、行政関係者など、さまざまな分野・視点から箕に関わってきた方々に集まりいただき、実演とパネルディスカッションの時間を持ちました。この報告書は、その記録です。

箕づくりをはじめとする民俗技術の継承に特効薬はありません。サミットで示されたような課題や取り組みを広く共有し、関係者の知恵を出しあうことで、ともによりよい道を探っていかなければならないのです。このサミットが、その長い道のりの小さな一歩になることを願っています。

今石みぎわ（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

目次

04 日本の箕

09 箕サミット―編み組み細工を語る

10 Ⅰ 実演記録　箕をつくる

10 太平箕［秋田県秋田市］

16 木積の箕［千葉県匝瑳市］

22 論田・熊無の箕［富山県氷見市］

28 Ⅱ パネルディスカッション　箕のこれから

29 保存会の活動と課題

34 討論

54 箕サミット2017　参加者一覧

日本の箕

かつて暮らしの必需品であった箕は、いまでも日本各地にその製作技術が伝えられています。地域ごとに最も適した自然素材を選びだし、最善の方法で加工され、人々の手わざによって仕立てられた箕。継承の危機に瀕しながらも、いまも箕づくりの多彩な技と知恵は各地に受け継がれています。こうした製作技術のうち、ここでは太平箕（秋田県秋田市）、木積の箕（千葉県匝瑳市）、論田・熊無の箕（富山県氷見市）を紹介します。

太平箕（おえだらみ）

秋田市郊外の太平地区で作られる太平箕は、イタヤカエデの木を薄く剥いで作ったツクリギと、細く裂いたフジを編むことで作られます。「水も漏らさない、馬が乗ってもつぶれない」と伝えられるほど緻密に組まれた編み目は、イタヤの白い肌が光沢を放つかのよう。使い込むうちに飴色に変化する、美しく丈夫な箕です。

歴史 不明（文献初出は18世紀）
素材 イタヤカエデ、フジ、ネマガリダケ、カバ（山桜）
用途 運搬、穀物の選別など
流通範囲 東北一円を中心に、かつては北海道・樺太から関東まで
生産量 最盛期（昭和30年代）で年間5〜7万枚
保存団体 オエダラ箕製作技術保存会

道具
イタヤの木を割ってテープ状に加工するために、何種類もの刃物が使われる。フジをツクリギの間に編み込む作業は道具を使わず、手でおこなう

箕の縁の材は10月末に採取するネマガリダケ（チシマザサ）。1度に200本を背負って、これを一背（ひとせ）といった

素材
編みあがりの横材と縦材になるイタヤカエデ（左）とフジ（下）。イタヤは11月、フジは5月ごろ採取する。この素材の採取と加工の作業が、箕づくりの労力の大半を占める

木積（きづみ）の箕

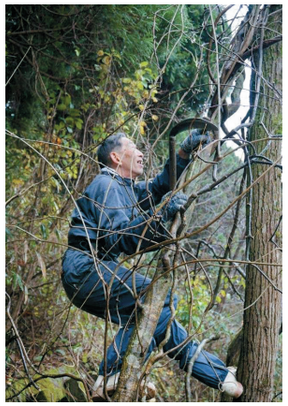
千葉県匝瑳市の木積地区で作られる木積の箕。薄く細く裂いたシノダケのヒゲと、何層にも剥いだフジで編まれる箕は軽く、しなやかなのが特徴。関東一円に出荷され、農作業だけでなく、製菓や製茶の現場でも重宝されました。縁はモウソウチクにヒゲをかぶせながら固定していくことで、持ちやすく、見た目も美しく仕上げられています。

歴史 元禄期（1688〜1704）に考案と伝えられる
素材 シノダケ、フジ、モウソウチク
用途 穀物の選別、運搬など
流通範囲 関東一円
生産量 最盛期（昭和30年代）で年間8万枚以上
保存団体 木積箕づくり保存会

素材
編みあがった時の横材がシノダケ（アズマネザサ）、縦材がフジとなる。フジは冬場に採取し、加工作業がはじまる春彼岸ごろまで土に埋めておくと、内皮が取りだしやすくなる

道具
ヒゲの間にフジを押し込んで編み目を詰める木刀状のキタチ、素材の加工や編み組みの仕あげに用いる箕づくり小刀など、多彩な道具がある

箕づくりが盛んだったころは、何枚もの箕をかつぎ、泊りがけで行商に出かけたものという



フジ採りは体力勝負。冬に採った内皮は叩き潰して編み材にし、夏に採った外皮は縁巻きに用いる（カゴアミドリ提供）

素材
編み上がったときの縦材がフジ、横材がヤダケとなる。フジは幅3cmほどで薄く繊維状になっているため二重に重ね、さらに薄く剥いだヤダケの身をフジの下に入れることで安定させる

道具
ヤダケの間にフジを押し込むための道具はミダチと言い、硬い柿の木で作られたもの。ヤダケの目を詰めるのに用いる箕包丁は、材料の加工にも用いられる

論田（ろんでん）・熊無（くまなし）の箕

富山県氷見市の論田・熊無両地区で作られる箕は、ヤダケと、皮ごと叩き潰して剥いだフジを編み組んで作ります。縁にはニセアカシアなどを用い、これをフジの外皮でぐるぐる巻いて固定すると、やがてフジがカチカチに固まって丈夫な持ち手となります。フジの素材の面白味にあふれた素朴で頑丈な箕は、北海道でのジャガイモ収穫などに現役で使われています。

歴史 約600年前に修行僧により伝えられる
素材 ヤダケ、フジ、ニセアカシア、ヤマザクラ
用途 穀物の運搬、選別のほか縁起物や福箕としても
流通範囲 北陸一円、北海道、関西（福箕）
生産量 最盛期（昭和30年代）で年間14万枚弱
保存団体 論田・熊無藤箕づくり技術保存会

箕サミット概要

［開催日］２０１７年11月13日
［主催］独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所
［於］東京文化財研究所（東京都台東区上野公園）
［参加者］86名

［プログラム］
第1部　実演・解説（太平箕、木積の箕、論田・熊無の箕）
第2部　パネルディスカッション「箕のこれから」
第3部　情報交換会

［参加保存団体］
オエダラ箕製作技術保存会
木積箕づくり保存会
論田・熊無藤箕づくり技術保存会

箕サミット――編み組み細工を語る

箕サミットの第1部「実演・解説」、
第2部「パネルディスカッション」を中心とした記録

I 実演記録

箕をつくる

太平箕（おえだらみ）

秋田県秋田市

今石みぎわ　太平箕は、10cmくらいのイタヤカエデの木を細く裂いてヒゴにし、同じく細く裂いたフジと一緒に編み組んでいくという技術で作られます。このたびは太平箕職人の田口召平さんと奥様の静子さんのお二人にお越しいただきました。

田口召平さんは昭和12年（1937）のお生まれです。秋田県秋田市太平黒沢の稲荷という集落で、箕職人の4代目として箕づくりをなさってきました。

「太平箕」とかいてオエダラミ、オイダラミと読むのですが、この太平箕を含む「秋田のイタヤ箕製作技術」は、2009年に国指定の無形民俗文化財になっています。その際には、太平箕だけではなく、仙北市角館町雲然（くもしかり）の箕づくり技術もあわせて指定になっています。ただこちらは、残念ながら本日来ていただくことができなかったため、今回は田口さんお一人での実演ということになりました。

解説　今石みぎわ（東京文化財研究所）
作り手　田口召平（たぐちしょうへい）

サミットの前半は、国指定の箕づくり技術3団体による実演です。まずは各団体20分ずつ、解説とともに箕づくりの実演をいただき、その後は自由に実演を見ていただくかたちをとりました。作り手さん同士も、お互いほかの箕の製作を見るのははじめての方がほとんど。会場からはたくさんの質問が飛び交い、素材の違い、加工法の違い、技術の違いに熱心に見入っていました。

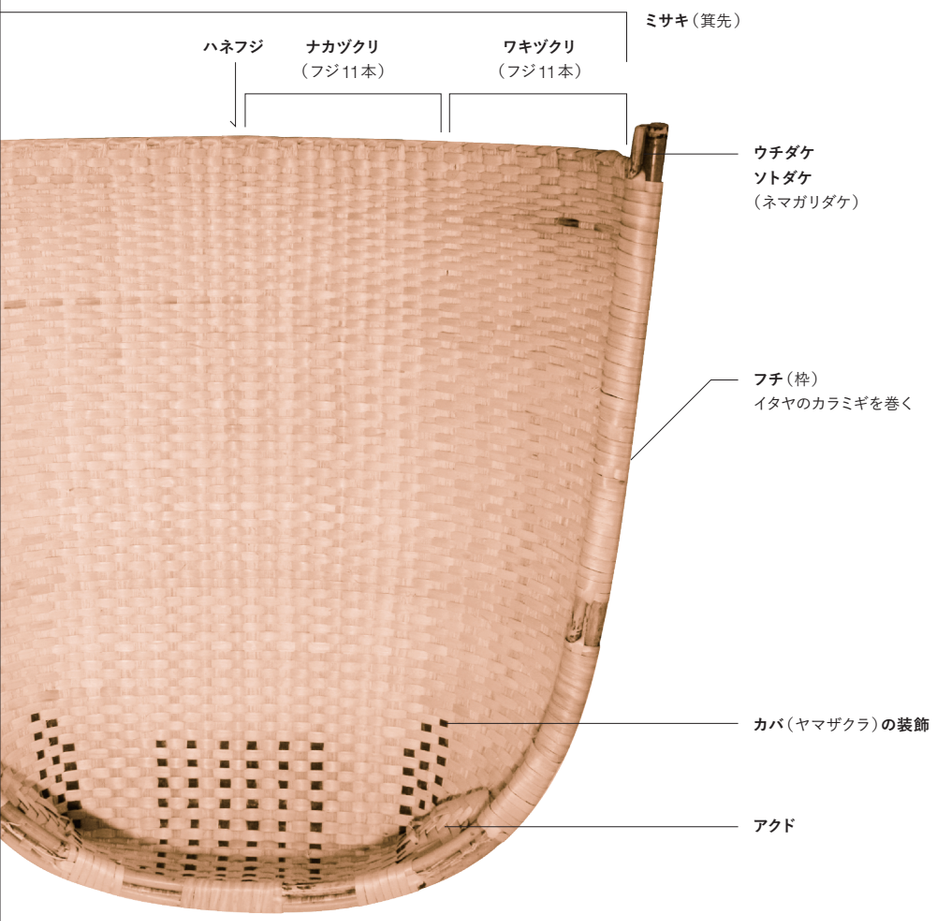
太平箕の歴史

今石　太平黒沢の箕づくりがいつ頃からはじまったのか、正確にはわかっていません。文献上、最初に出てくるものとしては、今から約230年前の寛政元年（1789）に「太平葛籠（タビタクツヅラ）」という表現でイタヤ細工の記述が出てきます（津村淙庵「雪のふる道」『日本庶民生活史料集成』20巻 1972）。そこには、「いたやといふ木をわりて あめり」とありますので、当時からイタヤを裂いて編む技術があったことがわかります。

その後、明治の初め頃になると、年間1万4千枚ぐらいの箕を出荷していたという記録があります。明治40年～大正3年ごろまでは、八森鉱山の鉱石を運搬するために相当数の葛籠が産出されたという伝承もあります。

このオイダラ箕が生産のピークを迎えるのは昭和30～40年代、これもいろいろな記録がありますが、年間5～7万枚を産出したと伝えられています。昭和35年の記録では、太平黒沢の96戸のうち、専業で

太平箕（中箕）　図解



箕づくりをしているのが32戸70名、農家との兼業で行なっているのが50戸65名と、実に集落の85％以上が箕づくりに関わってきたことがわかります。

つぎに箕の販路ですが、行商という形で各地に売り歩いていました。中心となったのは秋田や青森を中心とした東北地方ですが、北は樺太や北海道にも行商に行ったと言います。実際に田口さんも北海道まで行商に行かれたそうです。

また南は関東方面にも足をのばし、たとえば昭和20年代には千葉にも5千枚ほど出荷したという記録がありますし、昭和30年代には富山へも若干出したという記録が残っています。

これほど村中で関わってきた箕づくりですが、高度経済成長期以降、急速に離職が進み、昭和39年の段階で70数名いらっしゃった職人さんが、昭和56年になると10名にまで減ったという記録があります。そして専業で今日まで続けられてきたのは、こちらの田口召平さんお一人ということになります。保存会の中にはまだ技術を持っていて作れるという方もいらっしゃるのですが、高齢化も進んでおり、今は作っていらっしゃらないということでした。

太平箕の制作技術

今石　続いて箕づくりの技術についてお話しします。いま、田口さんが作っている箕は中箕（ちゅうみ）と呼ばれ、最も一般的な大きさです。できあがった時の縦がフジで、横がイタヤになっています。よく見ていただくと、アクド（立ちあがり部分）のほうのイタヤの幅が広く、だんだん細くなって、箕先（みさき）の最後3本くらいのイタヤがまた太くなるというように、幅の違うイタヤを使い分けています。

箕の中央には1本、ハネフジといって中心となるフジがあります。たとえば木積だと、ユミと呼ばれる道具に2本のフジを張って作り始めますが、太平箕の場合は1本のフジで始めます。

フジは、片側のナカヅクリに11本、ワキヅクリに11本、左右あわせて44本＋ハネフジ1本で、合計45本のフジが入ります。

箕の部位にもそれぞれ名称があります。ここの立ち上がりの部分をアクドといいます。これは方言で踵（かかと）を意味する言葉で、木積でも同様に呼びます。

採集されたフジ
皮と身にわけ、皮のみ持ち帰る
（2006年5月、川合正裕氏撮影）

先ほどご説明した通り、フジが縦材、イタヤが横材、そして枠はネマガリダケ（チシマザサ）を2本曲げてつけます。枠をくるくると巻いて固定している部材はカラミギといって、これもイタヤのヒゴを使います。箕先に補強のためにくるくると巻いてあるのもイタヤです。

工程はレジュメでもごく簡単に説明していますが、まず1年のサイクルの中ではじめに採集するのがフジです。フジは、今回来ていただいた3団体とも使っているのですが、採る時期や加工の方法がそれぞれ全く違うのが大変面白いところです。フジの採集時期は、他の2団体は大体冬場なのですが、秋田では5月初旬に採ります。3〜4年生のフジですが、5月だとその場でツルっと皮が剥けるんですね。ですから山で皮を剥いて、芯は山に置いてきたり、かつては焚き物として使ったとお聞きしています。そして皮のうち、一番外側の外皮を剥いで、残った内皮をまた何層かに剥ぎ分けて、それをさらに縦に裂いて細いフジを作ります。先ほど言いましたように、中箕だとこのフジが45〜50本必要になります。

それから次に採集するのがカバ（ヤマザクラの樹皮）です。カバは箕のアクドの立ちあがりの部分に、飾り兼補強の意味で入れます。職人さんによって入れ方（模様）が違ったようで、職人さんの印のようにもなっていたとお聞きしています。このカバはお盆過ぎに採集に行きます。30年〜35年生の木を使うということですが、近年はあまり山を利用しなくなったので木が更新されず、適材がなくなったということもお聞きしています。

ネマガリダケは10月の末に採集します。3〜4年生のものですが、採ったもののうち太いものは、ソトダケといって外側につける枠にします。これはあらかじめ火で炙って曲げておきます。ウチダケは曲げずに置いておき、実際に取りつける時に手で曲げる形になります。

1年のなかで最後に採りに行くのがイタヤカエデで、11月ごろです。20年生ぐらいの木を用います。まず木を半分に割って、それをさらに等分にして、その後、芯の部分だけ取り除いてしまいます。そして残った半円形のものから少しずつヒゴを取ります。その時にはクチタテと言って、木に鉈を差し込み、口を使って剥いでいく。あるいはサキ木（裂いた木）の一辺を右足で押さえて剥ぐ方もいるようで

右　ネマガリダケの採集。一尋五寸の長さが採れるタケを選ぶ（2005年10月）
左　イタヤの採集。木肌の色ときめ細やかさで良材を判別する（2005年11月）

す。最後に小刀で整えて終わりということで、このツクリギと呼ばれるものが、中箕で100～110本必要になります。枠を固定するために巻くカラメギは、イタヤの中でも特に質の良い、長いものが必要で、これが20本ほど要ります。

最後につくり方の手順ですが、先ほども言いましたハネフジを1本、ハネギという道具に固定して真ん中に置きます。ハネギだけだと安定しませんので、ハネギの両脇にコハネギというイタヤのヒゴを1本ずついれて3本にし、そこにツクリギ（イタヤ）を互い違いに挿していきます。その後、ツクリギの間にフジを編み込んでいき、アクドも編みあげます。

これも編み方の順番がありまして、片方だけ編み進めると歪んでしまうので、片面のナカヅクリを編んだら反対側のナカヅクリを編んで、その次に片面のワキヅクリを編む、というやり方をします。

いま、田口さんは箕つくり板という板の上にお座りですが、これも体重が一ヶ所にかかってしまうと箕がその部分だけひっこんでしまうため、できるだけ加重を分散させるために用いています。

そして箕が板状に編みあがったら、最後にフチツケといってフチ（枠）をつけていきます。今日はこのフチをつけてくださって、箕がひとつ完成する予定になっておりますので、ぜひ最後までご覧いただければと思います。

このオイダラ箕は、「上手につくると二代はもつ」つまり大体50年くらいですか、と言われてきました。また「丈夫な箕は水も漏らない」「馬が乗っても潰れない」とも言われたそうで、非常に丈夫で美しい箕になっています。

以上で解説は終わります。

質疑応答

会場　イタヤカエデのツクリギの作り方を教えてもらいたいです。

田口召平　イタヤカエデの木は普通5～6本くらいの株立ちになっています。林の木を直接見て、「この部分が使えるな」という判断をします。そして、その部分をちょうど1メートルぐらいに切り取って持ち帰ります。その1メートルの上は「ふたころ目」といいます。その林の状態によって、すっとイ

8ツ割りなどにしたイタヤを、クチタテで細く裂き、ツクリギを作る

タヤが伸びた状況の場合は、2本（2メートル分）いただいてくることもありますが、基本的には1本のイタヤから1本だけ、モト（根元）の方からいただいてきます。それがずっと伝わってきているイタヤの採り方です。

そのイタヤを、鉈を使って2つに割ります。簡単には割れませんが、私たちの方では簡単にできます。木に、このように鉈を打ち込みます。それからイタヤを横にして、台に載せて2つに割きます。それを繰り返して、4ツ、6ツ、8ツ割りと細く割ります。これをコワリと申します。そのコワリしたものを、今度は木の台で幅をずっと整えます。それから幅のもう少し狭い鉈をコグチに差し込みます。そうしてその差し込んだところから、昔は歯を使って齧って、こうやって裂いたものです。でもやりすぎで、私は前歯をみんな壊してしまいました。いまは足を使ってやっています。バランスをとりながら、厚さが約5～6㎜（分）で均等になるように裂きます。それを繰り返します。

そして先ほどお話がありましたように、このハネギという木にフジを張って、弓状にします。そして、一枚ぶりのイタヤのツクリギをここに置きます。ツクリギは木のモト（根元側）とウラ（梢側）が交互になるように置きます。そして、ツクリギの幅によって、順序よく4段階ぐらいにわけます。次にハネギの両脇にコハネギという、ツクリギと同じようなイタヤの木を置いて、ツクリギを差し込んでいってこういう形に並べます。この作業をうちではハネルといいます。そしていまやっているように、横にして、フジを編み込みます。

先ほどもお話がありましたが、「片がたづくり」といって、一方的には仕上げません。たとえばこちらのナカヅクリをやったら次に反対側のナカヅクリに進みます。そうして交互に仕上げます。だからそちらから見たときにまっすぐになる、これが正確な編み方なのです。片がたづくりをしていけば、ここのところがずっと変形していきます。

会場　編んだイタヤの最後を止める時はどうするのですか。

田口　それはフジが外れていかないように、最後に細いフジを入れます。うちではトメフジと言います。

ハネギにハネフジ1本を固定し、両脇にコハネギを置いてフジを挟んでいく

木積（きづみ）の箕

千葉県匝瑳（そうさ）市

解説　行木光一（木積箕づくり保存会）
作り手　金杉光恵、秋葉千枝子

行木光一　みなさん、こんにちは。千葉県匝瑳市の木積の箕です。今日はまずイタミ（板箕）というものを作ります。本日、イタミづくりの実演をしていただくのが金杉光恵さんです。箕づくり歴70年、いや80年ですか。もう一人、こちらが完成させるほう、仕立てといいます。仕立てをしていただくのが秋葉千枝子さんです。83歳になりました。よろしくお願いします。

木積の箕の歴史

行木　一般的には、木積地区では男性が仕立て、女性がイタミ織りという分業でやっておりました。秋葉さんは両方できるんです。イタミづくりも仕立てもできまして、完成品を一人で作れるということで、素晴らしいですね。ですから、女性はイタミづくりを基本にしています。男性は材料づくりが多いです。山に行ってシノダケやフジを採る。これはうちの方では冬場の仕事です。12月から3月いっぱい、3月のお彼岸までということでやっています。お彼岸を過ぎると水分が上がってきますので、あまり使わない。そういう決まりでやっていますね。

木積の箕は元禄時代（1688～1704）、加納おせんという方が木積地区におりまして、その方が考案したと伝えられています。300年以上続いております。

これで、明治時代も通してずっとやってきて、昭和のはじめごろが最大に作られました。木積で約120軒、1軒あたり1000枚で12万枚。そういう生産量で、関東一円、あとはお茶箕ということで、静岡のお茶どころや狭山（埼玉県）にも行きましたよ。相当、お茶屋さんには送りました。お米だけでなくて、茶箕も重宝されたんです。

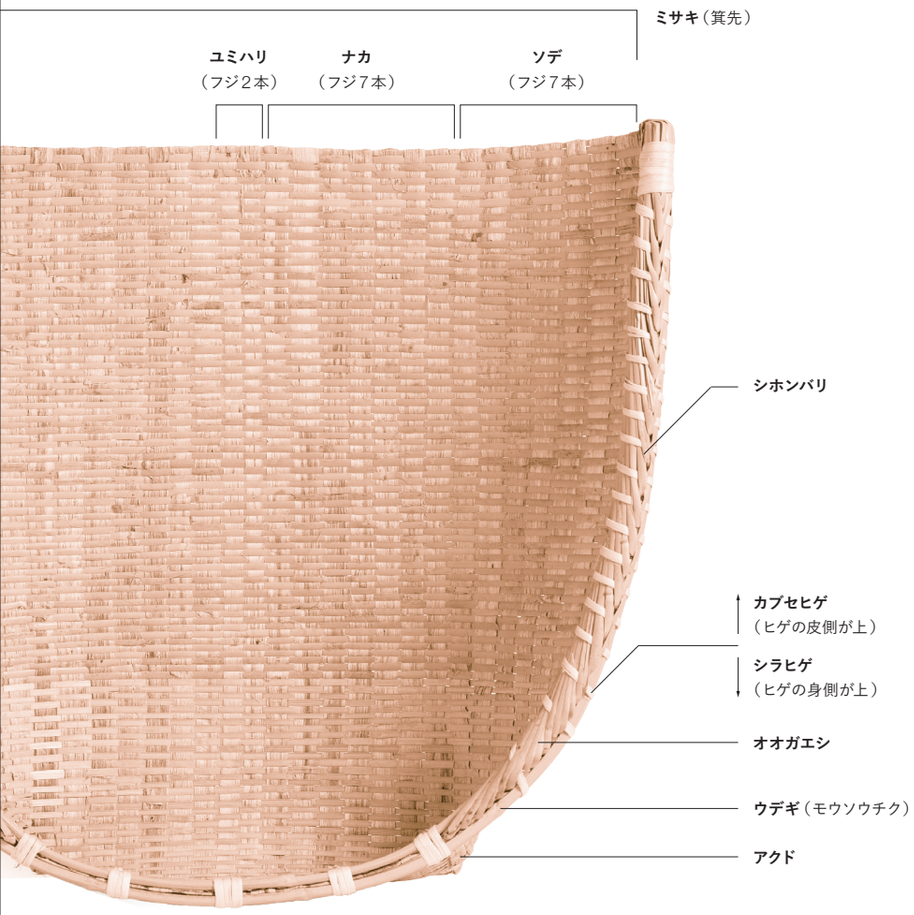
会場　製茶にはどういうところで使われるんですか。

行木　やはりお茶も風選して煽るんです。ゴミを取って葉だけとるという、そういう作業に使いました。あとは当然、運んだりもします。箕は昔から米を入れて運ぶ、入れると、そういうことに使われていましたので。いまは機械化が進みまして袋に入れる作業がなくなったので、箕も使わなくなってしまったというのが現状なのですが、ぜひこういう伝統工芸を残していきたいと思いますね。

この木積の箕をみなさんに評価していただくためには、ぜひ触ってもらえればと思います。この箕の柔らかさ、きれいさを見ていただくことが一番だと思います。製作技術が国の重要無形民俗文化財に指定されています。この技術をみなさんにはぜひ近いところで見ていただきたい。

実演の様子
イタミをつくる　キダチを使い、ヒゲの間にフジを押し込む（金杉光恵さん）

木積の箕（一斗箕）図解



木積の箕の制作技術

行木　こちらはイタミ作りで、これがユミハリ・ユミというものです。ユミには2本のフジが張ってありますね。これに今、ヒゲを挟んでいるところです。このヒゲはシノダケで作りますが、山から採ってきたものをこの状態にまでするのは大変なんです。シノダケはだいたい親指かそれ以内の細いものを使います。それを4ッ割り、5ッ割り、6ッ割くらいにし、剥いでいくわけです。これをヒゲと言います。ヒゲはよく洗います。そうしないと手が切れてしまいます。そしてようやく使えるということですね。

この挟むという技術も簡単ではないんです。きちんと挟まないとダラダラになってしまいますので、そのあたりを気をつけております。金杉さんに少し聞いてみましょう。このヒゲクバリ（ヒゲを均等にならしていくこと）は大変ですよね。

金杉光恵　そうですね、ヒゲのなかの柔らかいのは取り除きます。あまり硬いヒゲも挟んでいる時に抜

イタミが完成し、飛び出たヒゲを処理する（秋葉千枝子さん）

いておくんですよ。硬いものは箕先に入れます。箕先が一番大事なところだからね、そこが丈夫になるように。

行木　一番大事なところは、箕の一番先端のところです。「箕の先」でミサキですね。アクドは、意外と使いませんのでね、ミサキを大事にする。

会場　ミサキの修理だけにまわることはなかったですか。

行木　それはあります。ミサキはどうしてもお米を入れた時に抵抗がありますから、一番傷みます。それで昔は修理する人がいました。いまは修理する人はいませんし、使う人も少なくなりましたのでね。そういう、ミサキにきちんと良い材料を使っていくという話をしていただきました。

会場　良い材料とはどういう材料ですか。

行木　良い材料とはきちんとヘゲているものですね。あんまり柔らかいと弱いんですね。これは柔らかいです。そしてこちらが上等なヒゲです。端を持って、垂れてしまっているのが弱いヒゲ。だいぶ違うでしょう。そういう弱い材料はアクドにまわす。強度があるものが良い材料と言えますね。

会場　アクドの方はヒゲの皮側を箕のおもてにして、箕先のほうにいくと皮を裏側にしているの？

行木　そうです。これを見てもらうとよくわかりますね。アクドと箕先側で素材の裏表が違う。

金杉　皮の方が丈夫だから、このアクドの底の地面に当たるところが皮になるように。使う時に丈夫なように、皮を下に、やっているつもりです。

行木　そうですね。そういう考え方でいいと思います。使って強いと。アクドの方は、ポンっと地面に置きますから、外側（皮側）を表にする。あとは、豆なんかは皮の方が転がりやすいんですね（シノダケの身側の方がザラザラしており、豆がひっかかりやすい。箕の奥の部分は身側がおもてにきており、そこに豆が留まる仕組み）。そういう意味があるんですね。昔の人はよく計算して作りましたね。

それで、イタミはナカに7本、ソトに7本という決まりがありまして、仕上げていくわけです。

そしてできたものを、こちらでいま、仕立てという作業を秋葉さんがやっております。簡単にやっているようですが、この仕立ては非常に難しいんです。いま、外側の竹、ソトダケがはめてあるわけです。そして、内側の竹（ウチダケ）もはめて、2本です。秋葉さん、どうですか、仕立ての方は？

ヒゲとフジ
使う前には必ず水で湿らせる

秋葉　これは力がいるから、技だけではちょっと持たない。

行木　つぎに材料は、こちらがフジです。これは加工してあります。山で採ったフジは周りに甘皮がついていますから黒っぽいんですよ。その甘皮は4月になって取りまして、それから芯を抜きます。フジの皮には厚みがありますから、これが大事な材料になるわけです。乾かすとカンカンに硬くなりますから、使う前に水に8〜10時間晒します。そうするとふわふわになって作業しやすくなりますので、これを3枚か、2枚に剥ぎます。ぜひ何本か触ってみてください。非常に手触りがいいでしょう。そしてこれは非常に強いです。この違いがわかってもらえると嬉しいですね。

会場　フジの太さはある程度決まっているのですか？

行木　そうです。やはり親指ぐらいのフジがよいですね。太もものような木もありますが、それは使えません。やはり7〜8年生のもの、一番いいのは5年ものとよくいいます。あんまり太いものは芯が抜けないんです。無理に抜いても皮が割れてしまいますから、割れるのを嫌がりますから。そういったことで、今は山が荒れていますから、いくらか真っ直ぐに近いものを採るということで採っています。ねじれているものはダメなんですよ。

秋葉　キがのって（二重皮になって）いたり、曲がっていたりしたらダメ。なるべく真直ぐのものを使う。

行木　そしてこちらが木積で使っている道具のキタチ、木の太刀です。今ここで、フジを押し込むのに使っています。グッと押しますね。そして口（ヒゲとヒゲの噛み合わせ）をよく開けるということです。太平箕さんのほうでは手でやられていましたね。あれはすごいなと思いました。

今石　太平箕にも一応キダチはあるのですが、箕の寸法を測る測りだけに使っているんですね。このキタチは木積でも測り、尺になっていますよね。

行木　キタチは必ず長いものと短いもの、2本あるんですよ。短いものは小さい部分に使ったり、あとは、まだ腕が悪い人は小さいキタチを使って少しずつやったりします。

会場　太刀につかう木は何ですか。

行木　堅木です。ですから、ケヤキやカシですね。

行木　いま、仕立ての腕の掛かりがはじまりました。出だしは、オオガエシといいます。

ウナンカワを水で湿らし、2〜3層にヘグ

会場　いま、何本ヒゲを倒して巻いているの？

秋葉　大体5〜6本ですね。自分の勘で。シホンバリにくると2本おきなんだけど、オオガエシをやるのは2〜3回。こうやって組んでいきます。プロでも、柔らかいヒゲがやっぱりあるんですよ。それは組んでいくうちに、なかに入れちゃうか、切っちゃうかしないといけません。

今石　この腕を巻く最初の部分がオオガエシですよね。ここはヒゲを全部内側に倒すのですが、その先の箕先の方にいくと、2本のヒゲは外側、2本のヒゲは内側、というように左右に分けて倒して巻いていく形になります。この最初のアクド近くの部分というのは、シラヒゲといって、シノダケの身の部分が上を向いている部分なんですね。そこは、シノダケの性質上、内側に曲げやすいですね。ところが、箕のナカのほうにいくとヒゲの皮が上に向いているので、内側にそのまま曲げると折れてしまう。そこで、内側に曲げる場合はねじりながら曲げて、外側には素直にそのまま曲げているという形です。いまは、シホンバリがはじまったところですね。

仕立ての作業
ウチダケとソトダケをはめてフジのカラで固定し、飛び出たヒゲを処理する

論田（ろんでん）・熊無（くまなし）の箕

富山県氷見市

解説　小谷 超（氷見市教育委員会）
作り手　坂口忠範、上出篤美、北向進

論田・熊無の箕の歴史

小谷　みなさま、こんにちは。富山県氷見よりまいりました、教育委員会の文化財を担当しております小谷（おだに）と申します。今日は「論田・熊無藤箕づくり技術保存会」を作って後継者になっていこうと努力されている、お三方に来ていただいております。

まず歴史の話からいたします。だいたい600年ぐらい前にこの地に伝わったというのが言い伝えです。最初はお寺の修行僧が地元の方に作り方を伝えて、それを地元の人たちが真似て、当時は竹だけで作っていたものを、フジを使うようになって、だんだん堅牢なものになってきたと言われています。江戸時代になりますと、富山の氷見は加賀藩のなかに入りますので、加賀藩から材料のフジとタケを山に入って勝手に採ってもいいよという鑑札のようなものをいただいて、ずっと作り続けてきました。明治にをいただいて、そういう意味では藩の庇護なるとそういうものがなくなったのですが、やはり農作業には欠かすことができない道具ということで、大正ごろからは年間10万枚くらい製作したということです。論田地区、熊無地区、両地区だいたい100軒ぐらいずつあるお宅の95%が、藤箕づくりに従事していたと言われています。

昭和35年くらいには最大で年間14万枚ほど作っていたという記録もあって、とても大事な産業でした。しかしいろいろな社会変化がありまして、生産者も購入者も減ってきたということです。現在は、お聞きするところですと農業用の箕が100枚～200枚程度、主に北海道の方へ行っています。残

実演の様子
製作する坂口さん、北向さん、上出さんと
それに見入る参加者

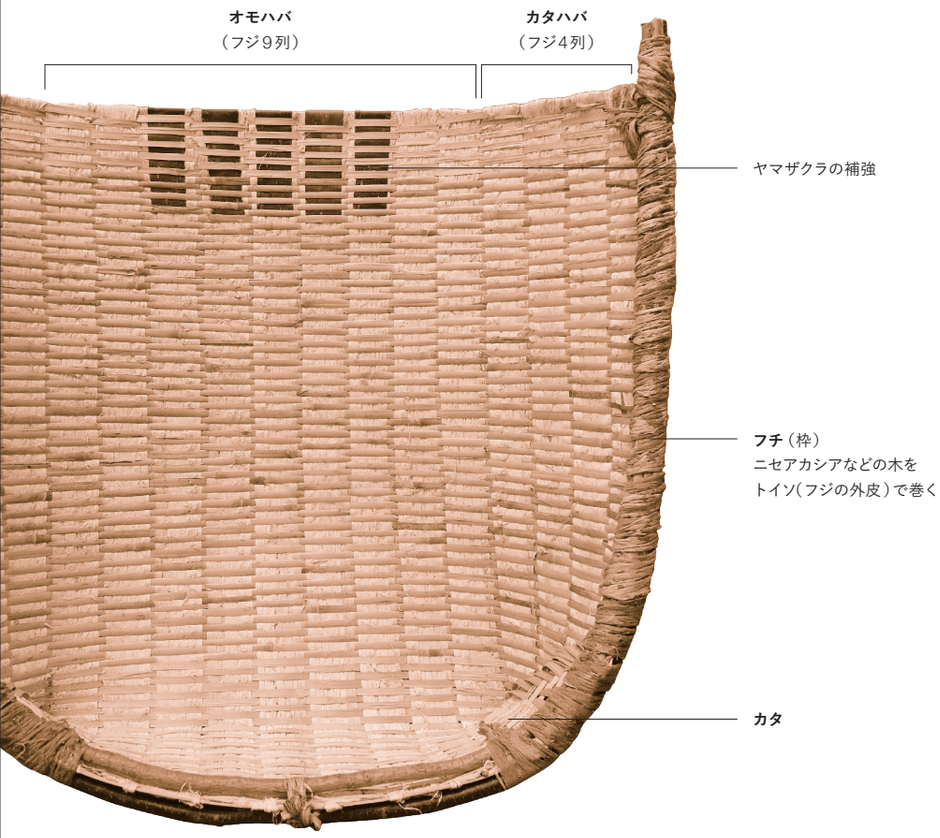
りが民芸箕ということで、ちょっと作り方が違うのですが、最終的にはお面をつけて神社で記念品として販売するための下地になる部分、これを千数百枚、いまも製作しています。

箕づくりの技術と後継者

小谷　いまは文化庁の補助事業で後継者養成事業を行っているのですが、今日お越しのみなさまは後継者になっていただいているみなさまです。実際には80～90歳代の生産者の人もいらっしゃるのですが、今年になって2人が亡くなるなど、技術が伝わりにくくなっている現状があるものですから、地元のなかで後継者になっていただける方と一緒になって活動をしているということです。

向かって左側におられるのが保存会会長の坂口さんです。坂口さんはお若い時に藤箕づくりに従事され、そのあと離れていらっしゃったのですが、国の文化財にも指定され、後継者もなかなかいないという状況をみられて、一念発起されました。そして保

論田・熊無の箕（中箕）　図解



存会を運営していこうということで、現在会長として関わってくださっています。北向さんと上出さんは、お若い時にはやられていなかったのですが、いま後継者になろうということで数年前から始められて、一生懸命さでは坂口さんにも負けないぐらい、取り組んでいらっしゃいます。

いま坂口さんが振っていらっしゃるのが、私たちのほうではミダチといいます。箕の太刀ですね。材質は柿の木です。大きい太い柿の木の、いいところだけしか使えないとのことで、去年作った時には、大きな柿の木を切り出して、6本しかミダチがとれなかったということです。

箕のこの部分をオモハバといいますが、今回はオモハバだけ完成させて、こちらのカタハバという羽根のような部分ですね、こちらを未完成の状態で持って来ていただきました。いま、ここを作る作業をされています。

こちらの上出さんの作業は、フチをつける作業です。フチはニセアカシアの枝です。かつてはヤマウルシを使ったそうなのですが、ニセアカシアは地面に挿すとすぐに生えてくるという良い性質があるものですから、ヤマウルシの代用品として近年は使

フジを叩いて潰し、年輪ごとに剥がして箕に織り込む

うようになっています。これは山へ採りにいくのではなく、植えているものになります。これを内側と外側につけて、地元でトイソー、トイソと呼ぶもので巻きます。これは何かと言いますと、先ほど秋田ではフジを5月ごろ採ってきて中身を捨てるというお話でしたが、まさに同じで、これも5月ごろに採ったフジです。まだ細い、親指ぐらいの太さの、2年生ぐらいのフジだと思うのですが、それを採ってきて中身を捨てて、外の皮だけを取ります。それを水につけたり、叩いたりして柔らかくしてから、このように巻いていきます。そして乾くとカンカンになります。持ち手が非常に頑丈になるのは、このフジで巻くことが大きいかなと思います。

そしていま、北向さんが作っていらっしゃるのは、花瓶敷きです。藤箕を練習するときには、よく花瓶敷きを作ります。論田・熊無のみなさんは、小学生の体験学習を長くやっていまして、毎年1回、地元の伝統を伝えるということで子ども達に体験させる時にやるのが、この花瓶敷き作りです。この体験学習では、かつては箕づくり全部をやっていたこともあったようなのですが、最近では学校の方も忙しくてなかなか時間が取れないということで、花瓶敷

ミダチを使ってフジをヤダケの間に叩きこみ、その下に薄くへいだヤダケを挟む

きを一緒に作りましょうということに変わってきました。今年も11月29日に行なわれる予定だということです。

会場　これなんか、もう少し小さくしてコースターにしてもいいかもしれないね。

小谷　なるほど。ただ、この目幅が広いものですから、小さいものを作るのがなかなか難しいということがあります。せいぜい花瓶敷きかなという感じでなさっていらっしゃいますね。

ここで、上出さんがされているフチの作業と木積との違いを説明しますと、こちらでは、横に出ている竹を切り取って、何本かだけ残したものを折り曲げていきます。内側と外側のタケがありますが、内側に出てくるものは全部切り取っているということです。

箕の横材はヤダケという竹を使っていますが、ヤダケの皮と、皮の一枚裏側の身を使っています。まず、箕先のところは竹の皮の部分を下にしています。1～4段目ぐらいまでですね。それよりナカは、箕の内側が竹の皮側になっています。これは使っていくときの滑りの良さのためです。この立ち上がりの部分を私たちのほうではカタ（肩）と呼んでいますが、ここは内側も外側も皮がない身の部分を使います。それで、ヤダケの皮の部分、その次の薄く身を削り取った部分を使用して、それ以外の丸い中の部分は全て捨ててしまいます。ですから材料としては捨てる部分の方が多いと言われます。

こちらは桜の皮です。箕の大きさによって3枚入れるものとか、5枚入れるものと変わってきます。中箕（ちゅうみ）は桜の皮が5枚ですね。

箕の種類は、小・中・大・長箕・水車箕があります。水車箕というのが一番よく作られたもので、北海道へよく出荷しました。北海道の博物館に入っている写真データを見ますと、氷見の箕がありましたので、よく利用されていたのだろうと思います。なぜ水車箕と言われるのかについてはまだ分からないですので、もし何かヒントになることでも教えていただけるとありがたいなと思ったりします。

会場　水車に物を入れるときに使うからとか？ ブータンで水車の木臼に穀物を入れるのに箕を使っていますね。

小谷　そうかもしれませんね、可能性としては高いですね。箕は全部で5種類ぐらいあるのと、ほかに民芸用のものがあります。民芸用のものはちょっと作り方が違います。兵庫県の西宮神社で、お正月に門が開いてみんなで一斉に走っていく行事（十日えびす）がありますが、そのお宮さんの露店で、ここから持っていった箕がたくさん売られます。ここから出荷したときには何もつけていなくて、ウン千円で出すのですが、あちらで面をつけて売るとウン万円ということになるということですが、そういうところでもよく利用されています。

こちらの箕の技術は、平成25年に国の重要無形民俗文化財の指定を受けて、3つの中では一番の後輩ですので、先輩のやり方を見習いながら、力を合わせて伝承に努めていきたいと思います。なにとぞよろしくお願いします。どうもありがとうございました。

フチとなるニセアカシアの木をはめ込む

Ⅱ

パネル
ディスカッション

箕のこれから

第二部では、行木光一さん（木積箕づくり保存会）、小谷超さん（氷見市教育委員会）、田口召平さん（太平箕職人）の3名をパネリストに迎え、パネルディスカッションが行なわれました（司会は東京文化財研究所・今石みぎわ主任研究員）。ディスカッションの目的は、箕づくりの現状や課題を共有し、ともに今後を考えること。パネリストはもちろん、会場からも活発な発言をいただきました。

今石　それでは後半のパネルディスカッションの部をはじめます。パネリストは木積の保存会事務局の行木光一さん、氷見市教育委員会の小谷超（おだにすむ）さん、そして太平箕職人の田口召平さんのお三方にお願いしています。

始める前に、千葉県匝瑳市の太田市長様と二村教育長様から「サミットのご盛会と皆さま方のご健勝をお祈りいたします」という祝電をいただいておりますので、ご紹介いたします。

さて、本日のテーマは「箕のこれから」という、ちょっと漠然としたテーマです。さきほど実演の中で実際の技術を見ていただいて、それぞれの箕がどういうふうに作られ、使われてきたかという過去のお話をしていただきました。そこでパネルディスカッションでは、箕の現在の課題、将来に対する展望、そういった現在と未来の話ができればと思っています。

はじめにパネリストの方々に5～10分ずつ、現在どのような活動を行なっているのか、技術継承の現状や課題、そして今後の展望などについてお話しいただければと思います。それでは行木さんからお願いします。

箕づくり伝承教室の様子［木積の箕］
この日はフジの採集とフジの外皮を削ぐフジコガシの作業（2016年4月）

保存会の活動と課題

木積の箕の場合

行木　みなさん、実演を見学して驚かれたと思います。本当に日本の三大箕づくり産地が集まって箕づくりができました。私もほかの団体の箕づくりをはじめて見て、本当に感動しました。どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

私たちの伝承教室は、第一土曜日を定例会として、月1回でやっています。1～2月は材料採りを行います。材料はシノダケとフジの2種類です。3月以降はフジ加工、シノ加工、そういったことをやります。こちらがフジを加工したウナンカワ（フジの皮を乾燥させたもの）で、このウナンカワの端の方から2～3枚にヘグという作業になります。6月になると材料がある程度できあがりますので、箕を作りはじめます。6～12月の間に箕づくりをして、だいたい一人一年で2枚を目標にやっています。

そのほか私どもでは4月28日～5月15日まで「おせん様のふじ祭り」を行なっています。フジをたくさん植えて、フジに感謝する。そしておせん様という箕の考案者にも感謝するというお祭りです。千葉県中から大勢のみなさんが、フジの花や伝統技術の箕の里を見に来てくれます。正式には「福箕とふじの里」と呼んでいますが、そういったことで多くの方に箕づくりの里に来ていただいています。

ふじ祭りでは箕づくりの実演のほか、米運び競争もしています。二斗袋のなかに入れたお手玉を箕に移して、筵まで運んでいって干し、それをまた箕に移して運ぶという作業です。そういう競争をやって盛り上げてもらっています。これは私たちの地元の豊栄小学校の運動会でも必ずやってもらっています。箕の使い方勉強になっているわけです。

そのほかに「一升福箕キット」という、紙で簡単に作る箕も用意しています。簡単なものですが仕立ての勉強にはなりますので、その箕を小学生に作ってもらって、箕はこういうものだよということを勉強してもらっています。子どもたちにも大変喜んでもらっています。

それから千葉県に「房総のむら」という施設があり

行木光一さん
（木積箕づくり保存会）

まして、そちらの収穫祭の時に行って箕づくり実演をしたり、匝瑳市の市民祭りでも実演をやって、たくさんの人に箕の素晴らしさを伝えているわけです。昨年はまほろん（福島県文化財センター白河館）にもお邪魔して、福島県の方にも実演を見ていただきました。そして昨年は千葉大学にも行って、久保光徳先生（千葉大学大学院工学研究科）に箕の良さを解明していただきました。私たちは作るだけで、箕のどこが良いかというところはよく分かっていませんでしたが、それを科学的に解明してもらいました。風選と言って、はたいてゴミを飛ばす作業を科学的に実証してもらいました。本当に嬉しかったですね。

そういうことで、色々な方に箕を研究してもらったり、たくさんの方にいらっしゃっていただいて、フジとシノダケで作った道具の素晴らしさを実感してもらって、本当にありがたく思っています。そんなことで、一年間に大勢の方と知り合いになり、箕の良さをアピールしております。

課題としまして、箕の良さをたくさんの人に理解していただければいいなと、今日のこの集まりでまた一歩進んだらいいなと思っている次第です。箕づくり保存会の伝承教室の生徒さんが一生懸命やっておりますので、箕の使い方をいろいろ研究して喜んで下さる方が少しでも増えていけばいいなと思ってやっています。今後とも、何か気がついたことがありましたらみなさんから提案していただくと、伝承教室も活気づくと思っています。箕は最盛期には12万枚出荷したという記録もありますが、そのようなことはいまでは無理な話です。けれども、箕のよさを少しでも伝えていき、利用していただければいいなと思っております。

今石　ありがとうございます。私からいくつか質問をしてよろしいでしょうか。箕の伝承教室は何年前からでしょうか。

行木　平成22年6月から始めましたので満7年になりました。相当できるようになった人もおられます。

今石　今、生徒さんの数は20人ぐらいといった感じですか。

行木　20人ぐらいの生徒さんですが、休まれる方もいらっしゃるので。毎回12～13人は必ず来てくれて、進めてくれています。

今石　そして、教えてくださる先生は現在、何名ぐらいでしょう。

後継者育成事業の様子「論田・熊無の箕」（氷見市教育委員会 提供）

行木　そうですね、いま佐久間会長の体調が悪いので、いまはお休みしています。あとは今日実演をした秋葉さんと金杉さんと、あとは作佐部（さくさべ）さんと古山（ふるやま）さんという方がいます。古山さんは胃の病気をしまして、いまはちょっと体調が悪いですが、講師をしてくれています。みなさん、がんばってくれています。

論田・熊無の箕の場合

今石　ありがとうございます。続いて、小谷さんから現状や活動の報告をお願いします。

小谷　氷見市教育委員会、小谷でございます。よろしくお願いいたします。私たちは今日実演でいらっしゃった3人の方を中心に、後継者養成の活動をしていただいています。たぶん他の2団体と異なるのは、民俗技術としてははじめて、文化庁の補助事業「民俗文化財伝承・活用等事業」をやらせていただいています。平成27年度から始めて3年目になります。

平成27年度はＤＶＤを作成しました。これは普及用にも使えますし、また技術伝承される方々が先生から毎日習えるわけでもありませんので、そうした時に見て勉強できるということを願って作りました。また地域の中で学習会を開いたりもしていますが、中心となるのはこの後継者養成事業と位置づけてやっています。

初年度である平成27年度は、ずっと作っていらっしゃった職人の方々に先生役として出てきてもらっていたのですが、みなさん一様におっしゃるのが「教えたことなんてない」ということなんです。教えるということがどうもしっくりこられないみたいで、だんだんフェードアウト気味になられたということがあります。

こうした中で、今日いらしている会長の坂口さんはお若い時に箕づくりをなさっていて、身につけた技術をお持ちだったものですから、坂口さんを中心に、上出さんと北向さん、今日はいらっしゃっていませんが山崎さんという方、お三方が中心となって活動をしています。そのほかに若い市の職員さんが2人くらい来られたり、おひとり、滋賀県の方も習いたいということでお越しになられたりということがあります。

小谷超さん（氷見市教育委員会）

ということで、私たちはどちらかというと広くお伝えするという前に、まずはきっちりと作ることができるようになっていただいて、そしてその次の段階で広く普及を、と考えています。今は年1回小学校で、地域の伝統技術を教えるということで、指定される前から長年活動されてきていますが、そうしたことは継続しながら、ゆくゆくはいろいろな方にも体験していただくことができればいいなということで、今回、匝瑳市さんの活動を見てこういうおもしろいものがあるなと勉強させていただいたところです。

太平箕の場合

今石　ありがとうございます。続きまして田口さん、よろしくお願いいたします。

田口　先ほどの作業着のまま、登壇させていただきました。ひとつご勘弁願いたいと思います。秋田の山奥からのこのこ、このために出て参りました。何とぞよろしくお願いいたします。

それではさっそく報告させていただきます。国の指定をいただく平成21年（2009）の前、うちでは平成19年に秋田市の文化財として指定をいただきました。その次の年から、秋田市の東部公民館というところでイタヤ細工教室をやってくれないかと頼まれまして、イタヤ材を使って色々な小物を作る教室が始まりました。それから、平成21年の指定の翌年から、保存会員のみを対象にしてきた事業があります。そして地元の小学校からの要請により、太平地区にはこんな文化財がある、伝統文化があるということで、国指定の年から現在まで「小さい箕」を作るという事業を小学校でやっています。その3本立てでやってきました。

太平小学校には7月に2回ほど行って、箕を2枚作ってもらっています。ひとつ自慢話をしますが、箕に編み組むイタヤの幅の広い木に、生徒さんたちの将来の夢を書いてもらったことがあります。そうしたら「私は将来大工さんになって新しい家を建てたい」とか、「お花屋さんやってみたい」という女の生徒さんもいらっしゃいました。「消防士になりたい」というのもありました。その中で面白かったのが「私は宝塚のスターになります」という女の子がおりました。その子は今、高校受験に向かって頑張っております。今年、この「夢をのせる箕」を

小学校での「小さい箕」を作る授業［太平箕］
（2013年9月、岸本誠司氏 提供）

もう一度実現したいとして、学校の方へ提案しています。文字自体は斑ら模様になってよく読めませんが、生徒さんひとりひとりの熱のこもった作りが編み込まれている。私も学校の先生も、これは貴重な宝物だと、こういうふうに思っています。

こういう事業をやってきたのですが、いかんせん人というのはいつも健康状態を保つことができないものです。平成20年にイタヤ細工教室を始めた時には、うちの箕の工芸組合も人がたくさんおりましたので、その当時は十分対応できておりました。設立当初、組合員は26名おりました。しかし、その26名のうち体調不良により2名が退会し、近年7年の間に、私より断然若い方3人がお亡くなりになってしまいました。もちろん、私の先輩は87～88歳の方が4人おりますが。

それに、山に歩くというのは私ひとりなもので、材料の入手がなかなか困難になってきました。先ほどの26人のなかでも、私を支援してくれるという意味で、イタヤ細工教室に出席していた方々が急に8人保存会に入りました。ところが支援どころか、何もやれないです。平成22年から保存会員を対象にした事業で、私も現場へ行っていますが、そのためには前もってイタヤカエデを探して、状況を確認して、山主さんに交渉します。そしてみなさんを連れて行きます。ところが秋田では、本気になって箕のために何かをしようという人が、なかなか現在まで現れておりません。そんなわけで悲しいかな、保存会員の中で箕を作ろうとする人はひとりもおりません。材料をすべて私が採ってきて加工して、さあ何やら作ってくださいと、そういうことをやっているのが、私たち現在の活動状況です。以上です。

田口召平さん
（太平箕職人）

討論

今石　ありがとうございます。これから討論に入っていきたいと思いますが、交通整理をするために、箕づくりの技術を伝えていくために必要な要素に分けて話を進めたいと思います。それは1つ目が原材料、2つ目が作り手さん、そして3つ目が使い手さんということになると思いますが、時間がありませんので、今回は2つ目の作り手さんというところから話したいと思います。

箕づくりの技術を伝える

今石　それぞれ保存会を作って活動をされていますが、うまくいっている面、うまくいっていない面あると思います。木積と氷見とでは、ある意味、対称的なやり方を選択していて、木積の場合はかなり広く門戸を開いて、趣味・サークルという感覚もありながら、一生懸命やりたい人も集まってきているという状況です。それに対して氷見では、地域を限定して、まずは地元の人のなかから後継者を募集したというお話があったと思います。いろいろなやり方があるということですが、まずは行木さん、どのぐらいの範囲で生徒さんはいらっしゃっているのでしょうか。

行木　遠い方では東京の方もいらっしゃいました。何回か来て終わってしまいましたが。県内の方がほとんどです。うちの方は、どこから来ても、第一土曜日の9時から15時までであれば参加してくださいというスタンスでやっています。きちんと来てくださる方は来ていただいて、見てもらってもいいし、やってもらってもいいし。うちに来てもらえばすぐに箕づくりができる体制になっているんですよ。一番最近では小倉さんという方が、今日も会場に来ていますが、2回来てくれていて、箕の1枚目がもう少しで出来るというくらいまでやってもらっていますから。そんなことで、ある程度、地域はどこから来ていただいても構わないです。遠い所は千葉県の鴨川からです。そこから3時間ぐらいかけて来てくださって、ありがたく思っております。

今石　朝5時くらいにお家を出られて、毎回通っておられる方もいらっしゃるということですが、実は

秋葉千枝子さん
（木積箕づくり保存会）

私も3年前くらい前に、はじめて様子を見てみようと思って木積に伺ったら、あまりに居心地がよくてズルズルとそのまま2年間通わせていただいたという形でした。そうして広く門戸を開くことで、一般の人も非常に入りやすい雰囲気があると思います。

一方で、先ほど田口さんからも話がありましたが、教える側の負担といった面ではいかがでしょうか。結局、先生方もボランティアでやってくださっていて、だんだんみなさんもお年を重ねてこられて、身体もしんどいという中で続けてらっしゃるということですが、その辺りはいかがでしょうか。

行木　本当にそこのところはね、秋葉千枝子さん！ありがとうございます！ということなんですよ。うちの講師なんです。今日、実演で仕立てをやってくれた方ですが、本当に熱意を持って、金杉さんとも一緒にやってくれていますから。本当に欠かさず来てくださって指導してくれているんですよ。やっぱりそういう方がいないと会は引っ張っていけませんので。私は手配するくらいで、何もできなくて申し訳ないんですが、本当にそんな形で講師さんには負担をかけてしまっています。

今石　秋葉さん一言いかがですか。

秋葉千枝子　この箕を後世に残すために、生徒さんに頑張っていただきたいと思います。そういうわけで私もがんばって、皆さんにもがんばってもらいたいと思います。ありがとうございます。

今石　木積の場合は、7年経って少しずつ生徒さんの方も教える側にまわれるような体制がとれてきたのかなという形ですね。生徒さんは遠慮されてなかなか積極的にはお教えになっていないのですが、お聞きすると私も本当によく教えていただきました。

続きまして氷見では地域をかなり限定してやるという形ですが、それは現在うまく回っているということでよいでしょうか。

小谷　さきほど東京からの時間をお聞きしましたが、1時間半ほどの距離ということもあり、人口規模が大きければ、たぶんそうしたものに関心を持たれる方も、やはりそれなりにいらっしゃる。もちろんPRが上手だからわざわざ遠いところからいらっしゃるというところもあるのでしょうが、氷見の場合はそのあたりは最初からなかなか望めないというところもあったというのが、「広く」という

方式を選択しなかったひとつの理由ですね。
もうひとつは、この論田・熊無という両地区で、600年間続いてきたということをひとつ大事にしたかったという思いがありまして。もちろん地元のみなさんといろいろな話をするなかで、まずは地元の中でできる方を、ということで、いま立ち上がってくださったみなさまにやっていただいています。いまは週に2回、冬にかけてはもっとみたいな話も言われています。広く門戸を開いてやる場合はなかなかついてこられないサイクルだと思いますが、そのくらいの密度でいけば、ひと通りできるようになる。できるようになれば、その次のステップとして、見学対応や体験対応といったこともできていくのではないかと思っています。いまのところはそのような流れになっています。

今石　ありがとうございます。木積の場合は首都圏に近い。氷見の場合は人口的にそういうことをやっていこうという方が少ないという話ですが、確かに木積の場合は、農業をやってらっしゃる方で若くて志の高い方がかなり来ておられる印象です。その点で秋田はどうでしょう。

田口　……悲しいです、本当に。

今石　人はいるけれども、本気で学ぼうという方がいらっしゃらない。

田口　そうですね。現在はおられないです。悲しいです。ひと様も少ないですね。

今石　もしこの会場の方で、真剣に秋田のオエダラ箕を学びたいという方がいたら受け入れてくださいますか。

田口　私はやります。うちは作業場もちゃんとしていますし、もし「私はやりたい」という方がいたら、いつでも受け入れます。本当の話です。

今石　本気の方限定でお願いしますが、そうですね。そういったいろいろな問題、今の教え手さんの育成や負担のお話ですが、そのなかで、3つの団体を見ていて強く感じるのは、コーディネーターとなる方がいるのか、いないのかという点がとても大きいということです。木積の場合は行木さんが裏方にもまわって非常に尽力されていますし、氷見の小谷さんは教育委員会の立場から非常に尽力されて、国の補助金なんかも取ってきて活動されています。

田口　ひとりでコーディネーターはできないですよ。一から十まで全部私ひとりなんですから。つまり、孤立無援という状態です。

今石　…という状況で、私達も本当にどうしたらいいのかなという思いでおります。今日実は秋田の地元新聞の方にも来ていただいていますので、ぜひ大きく報道していただければ、そして何か刺激になってもらえればと思っています。

田口　本当にそう思いますね。

箕づくりの技術を受け継ぐ

今石　いまは担い手側のお話でしたが、今度は生徒さんの方にも少しお話を聞いてみたいと思います。まずは氷見の坂口さんよろしいですか。実際に箕づくりをされてきてどうだったかということや、いま感じてらっしゃる課題などありましたら一言お願いします。

坂口忠範　この藤箕づくりっていうのは身体で覚えないとあかんもんやから、なかなか人が来てくれない。結局何年もかかるわけ。だから1週間に2回ぐらいやってもなかなか覚えられんの。いっそのこと、繰り返しばっかりだと思うんだけどね。それが一番の課題です。

今石　坂口さんはお若い時には箕づくりをされていたのですか？

坂口　20歳時分にやったもんで、一応できる。一応できるからまたやれたので、最初からやるといったらやっぱり難しい。

今石　いま年間何枚ぐらい箕を作っていらっしゃるのですか。

坂口　いまは1年に60枚ほどかな。他にも仕事を持っとるもんやから、それぐらいしか作れない。

小谷　材料採集の話もしてもらえますか。

坂口　材料採集も本当に難しいんです。だいたい材料をぱっと見ただけで、使えるか使えんかという、フジは見極めが一番大事。フジをパッと切って、見ただけで、あっこれはダメだっていうのが結構あるの。私はだいたいわかるけど、他の人が「これはどうや」って持ってきたものは、1／3は捨てるようなものです。使い物にならないです。ただそれをやると、新しく来る人は「こんな大変な仕事はない、辞めた」って、こうなるんです。だから、「作れる作れる」って褒めて、そっと影で捨てる（笑）、そうしないとなかなかついてくる人はいません。

行木　フジは素人が採ると何が悪いんですか。

坂口　これはちょっと口で言ってもわかりません。

坂口忠範さん
（論田・熊無藤箕づくり技術保存会）

第一にはまっすぐなものです。曲がったものはまず捨てる。あと切ったなかで、年輪がはっきりとしているものは使えるんです。年輪がチクチクチクと針で突いたような穴になっているものはまずダメ。その見極めをするのは、ちょっと時間がかかります。

今石　本当にそうですよね。私も木積の伝承教室でみなさんについて山の中に入っても、フジの見分けすらつかないという状況です。そのあたりは身体で覚える技術ということですね。

坂口　それと山にあるフジというのは、だいたい必ず横に出ているもの。クズとかは冬になると垂れてしまうけど、フジだけは必ずこうして横に出ている。それで、ああこれはフジだなという感じでそこに行くんです。フジのあるところを探すのは、それが一番簡単です。

今石　ありがとうございます。ほかのお二方はよろしいですか？

上出篤美　こんなもんでしょう。それよりちょっと不思議なのは、木積のフジは1月に土に埋めて4月に掘り起こすのは、どんな意味があるんですか。

行木　木積では寒い時期にフジを採ります。ですから12～2月が一番の時期ということですね。これは水分の上がらない時期に採るということです。これは木の性質です。材木もそうですが、水分の少ない冬場に採って埋めておいて、お彼岸頃、3月18日以降に木が動き出しますから、そうしたら掘り出して、うちの方では黒い皮をまず剥きます。このアマチャという皮は、冬場は剥けないんですよ。その後、中の芯を取り出します。芯をはずした皮はウナギの皮みたいなので、うちではウナンカワと言いますが、その芯を取りだすのは冬場にはできないんです。皮と芯がくっついてしまっているということです。そして無理に取ると割れてしまうということで、それはダメなんです。だから4月に入ってからフジの皮を取り出す作業をする。夏場のフジは夏フジといって、「夏フジを切って使っちゃダメですよ」というのは昔から言われています。虫も喰うし、質が落ちるという点で、そういう言い方がされていまして、使っておりません。昔からの話です。

今石　ありがとうございます。こういう話は本当に面白くて、ずっと聞いていたいのですが、少しテーマを戻します。箕の後継者ということで、木積から生徒さん代表で鈴木光治さんにひと言お願いします。伝承教室が立ち上がって7年がたちますが、もう箕を教えるレベルにまで達していらして、この可愛い小さい箕を、民芸箕としてご自身で工夫されて作ってらっしゃいます。

それからもうひとつ、箕というのは胡座（かべら）をかいた姿勢で作るもので、非常に身体の負担が大きいんですね。膝や腰が痛くなってくるとできないというところがあるのですが、先ほど鈴木さんにお伺いしたら、座ってできる箕づくり台というものを、コンパネを使って発明されたということでしたので、その話もあわせてお願いいたします。

鈴木光治　鈴木と申します。今日はみなさんにお会いできたことを本当に嬉しく、感謝申しあげます。私は平成20年に、ここにおられる秋葉千枝子先生のことを新聞の紙面で知りまして、当時、自分で箕づくりができるならぜひ教えていただきたいと願っておりましたら、その2年後、木積の箕づくり教室がスタートしました。そこで私は新聞を持っていちばんに飛び込んで、秋葉千枝子先生を訪ねました。そして行木さんにもお会いでき、ぜひ参加してください ということで、いま思えば7年が過ぎ、8年目に入りました。ようよう私も8年目ですが、まだ素人でございます。研究課題もいっぱいございます。技の伝承や保存ということになると非常に心苦しく、重苦しくなるんですね。緊迫感もあるし、最初のうちは重荷を背負うたような感じになりました。途中で何度か断念をせざるを得ない時もありました。何しろ難しい。技術的要素が非常に絡んでいますので、なかなか機械仕事ではいかない。すべてが手作業です。首を使う、歯を使う、腰を使う、すべて身体全体でことをなす作業なんですね。首を使った時には首が1週間も回らなくなってしまった。歯も使えない。椎間板ヘルニアで手術もしましたので、腰もいかんせん悪いということで、長いこと胡座をかいて座る作業が困難なところもありました。そして、先ほど今石さんからご説明がありましたように、今石さんは伝承教室に通って技術の記録を2年かけて制作され、私どもに1冊教本をいただきました。私はいま、これを宝物として、今日さらに前進しようと努力しているところです。

伝承というのは非常に堅苦しい、難しい、厳しいものがありますが、でも私が途中で断念をしなかったのはなぜか。私はまず一番に「箕」ということは考えませんでした。それよりも教室のみなさんの輪、なごやかな雰囲気、それによって私は支えられ、今

採集したフジを埋める
（2017年1月、木積箕づくり保存会）

日に至ったわけです。ですから、今でも箕づくりが一番とは考えておりません。輪を一番に考えております。みんなと楽しくできる。楽しく伝承を継承できるということが一番なんじゃないかなと、私は考えております。

そして今石さんの教本の中に、技術記録には限界がありますと書かれています。そして記録しすぎたらモチベーションに影響を与えるかもしれない、モチベーションは個々に高めていただきたいということで、私は心を奮い立たせられました。身体がどんな状態の人であれ、腰が悪くても、足が悪くても、首が悪くても、箕に挑戦できるように、座って・立って箕が作れるという台を作る段階まで漕ぎつけました。そしていまも前進の一途ですが、伝承教室の中ではおかげさまで、いわゆる先生の補助的な立場でおります。そして実習に関しては自宅に帰ってからゆっくりと、それなりに一歩一歩前進しております。

これからは、箕をあまり堅苦しく考え過ぎず、まずみなさんメンバーと楽しく、和気藹々できることが一番だと思います。これが継承につながるのではないかと常々考えております。そして、座って・立って、どういう形であれ、自由に楽に箕が作れるという方法を、早く教室で広めて、さらに幅広く伝承を広めていけたらいいと思います。

教室に入った以上は、伝承をさらに深めていき、そして今日ここでお会いできた、富山、秋田と、この3者の箕が結合された、ブレンドされたような箕の発想もいいのではないかということもいろいろと考えています。これからも箕が幅広く伝承されていくことを、私は常々願っております。

今石　ありがとうございます。木積の伝承教室は本当に楽しいですよね。椅子に座って作れる箕の作業台、ご関心ありましたらこの後の情報交換会の時に鈴木さんにお聞きになってください。

それから後継者ということで、延原さんいらっしゃいますか。今回の3団体の方ではないのですが、ご自身は別府の竹細工の訓練校を出られてから、岩手県一戸町面岸（おもぎし）というところで、面岸箕の後継者として学ばれていらっしゃいます。ぜひ後継者としての現状、課題等についてお話しいただければと思います。

延原有紀　岩手県北上山地の山のなかから出てきました、延原と申します。はじめまして。みなさまの

延原さんの師匠である
面岸箕職人の戸部定美さんと
素材のニキョウ
（2017年、岩手県二戸郡二戸町面岸）

活動の報告を興味深く聞かせていただきました。私の場合は、特に後継者育成の募集があったわけではなくて、面岸の箕というものを知って、個人的にこの箕を作りたいということで、役場に問い合わせていま教わっている方を紹介していただいて、本当に個人的に教わっている感じでした。箕を習いたいがゆえに定職は辞めてしまって、3～4ヶ月はその職人さんにべったりとついて、材料を山に採りにいくところから教わりました。

とにかく山に一緒に入るのが楽しくて、自分も好きなんだなと思いながらやっていたのですが、やっぱり箕だけで生活ができるわけではないので、アルバイトをしながら細々と続けている状態で、そんなに数は作れていません。1年に4～5枚しか作れていないので、なかなか上達しない状況なのが悩みですね。この4月からはアルバイトを始めまして、平日はそちらの仕事をしているので、さらに箕が作れなくなってしまっているのですが、細々とでも箕を作ることは続けていきたいと思っています。

いま住んでいる北上山地の山の中では、やっぱり好きで箕を使っている人もまだいて、自家用で豆を選別したりされている人もいるので、もっと使ってくれる人が増えたらいいなと思って、地域の人に面白がってもらえるような感じで続けていければと思っています。

今石　素晴らしい取り組みですよね。こちらの箕を紹介しますと、ニキョウ（和名サルナシ）という蔓性植物が横で、縦が伝統的には柳ですね。シロヤナギを使った非常に美しい箕です。

箕をひろめる

今石　いま延原さんから、箕だけでは生活ができないというお話、あるいは使い手が増えていってほしいというお話がありましたが、時間も迫っておりますので、次の話題である使い手の問題に移ってまいりたいと思います。

箕というのは暮らしの民具で実用品ですから、これを現代の生活のなかに改めてどう位置づけていくのかが、非常に重要になってくると思います。特に民俗技術というのは需要がないと食べていけないということがありますし、ある程度数を作っていかないと技術鍛錬もできないという側面もあります。ですから使い手がいないと困るのですが、今日の3団体

では、いまどれぐらい需要があるのでしょうか。把握されている範囲で結構ですので教えてください。

行木　木積での生産は年間で10～20枚。そのぐらいの生産量で間にあってしまうということですね。注文自体が非常に少ないんです。本当にポロポロッと、時たま買いに来てくれる人もいます。インターネットで見ましたとかね。

今石　それは、農業用で使われるのでしょうか。

行木　そうですね、まず農業用です。ですから一斗箕が欲しいということですね。小さいものは土産物屋に並べておいても、あんまり…。一年に1枚くらいは売れるかもしれませんよ。4千円くらいで売っていますからね。

今石　かわいいんですけどね。

行木　ええ、かわいいんですけどね（笑）。その小さい箕でも売れないので、3千円ぐらいで売らないといけないでしょ。千円じゃ売れませんからね。

今石　採算がとれませんからね、手間がかかっていますから。

行木　並べておいても、本当に年1枚か2枚程度のものですね。成田でも扱っている竹細工店があって、藤倉商店と言いますが、結構そこには販路があって売れてくれるのですが、そこでもやっぱり年間20枚あれば十分といった具合です。あと値段も非常に高いんですよ。これは仕方ない話なんですけどね。値段の話をしたら申し訳ないのですが、ちょっと高いので、そこで買う人の意識との間に5千円～1万円のギャップが出ちゃうんですよね。そこのギャップもあると思うのですが、それはそれで乗り切らなければいけないですし。作る方も少ないですし、値段もそこそこ出ないといけないしということで、そこは困っているところではあります。

今石　作る工程を追っていくと、決して高い値段ではないということがわかるのですが、そこがなかなか伝わらないということもあるかと思います。続いて小谷さん、そちらでは茶箕などの製作も考えていらっしゃるとのことでしたが、その辺りも含めてお願いします。

小谷　北向さん、数字だけ教えていただいてよろしいですか。

北向進　北海道にいっているのはジャガイモの収穫に使うもので、100枚前後という感じ。あとは、兵庫県の飾り物、縁起物に使っている箕は、例年2500～3000枚程度やね。それも大・中・小

手のひらサイズの一升箕（木積の箕）
製作は箕づくり保存会の鈴木光治さん

とあるから一概には言えないけど。

小谷　合計で3千枚ぐらいでしょうかね。いま生産者の方々は、今年になって亡くなられた方もいらっしゃったりして、6～7軒という形ですか。それで、いまは坂口さんも生産者に入っていらっしゃるんですね。という形で、そのくらいの生産はあります。一定の売り上げはありまして、製作者に配分されているということですが、手間と材料採集などの経費を考えるととても安いというのが、ずっと続いている実情だと思います。

そしてもうひとつ、去年、本当にいろいろなことを考えました。最近、女性の間でクラフトショップのようなものが人気だというお話を聞いて、箕そのものだとなかなか利用はないので、箕の形を変えたりすることで何かできないかと考えて、試してもらったりもしたのですが、うちの箕はフジの幅が広くて小さいものが作りにくいということもありました。もしかしたら、ほかの2団体の箕はもう少し細かな細工ができるかもしれないですが、いまはちょっとそういうことはうまくできない感じになっています。

今石　ありがとうございます。田口さん、いかがでしょう。

田口　わたしの場合は、私が作って、私が売ります。県内でも縁起物として新宅祝い、年祝いに使われます。そのほかに、去年は梅干しを干す器にするという人もおられました。それから北海道の方で、落ち葉を拾うという女の方もおられました。いま、ほかの2団体で高い安いという話がございましたが、職人というひとつの立場から考えますと、高い安いではないです。私が主張するのは、その職人に見合った値段で買ってもらう。だから私は旅に出る時には必ず、いろいろな新聞に出たとか雑誌に出たとかいうのを全部持っていきます。私はこういう人です、まがいものではないです、私は箕を作るのに2日も3日もかかります、そうすると職人さん方はいま日給いくらですかと。そうすれば、お客さんのほうで値段を決めてくれます。そういうやりかたで、いろいろな方にお世話になって今まで生き延びてまいりました。ありがとうございます。

イタヤの場合は、竹よりもいろいろな小物を作っても作りやすいなということもわかっております。これから少しばかり、仲間にそういう方向づけをするということも考えております。

太平箕の行商姿の嵯峨林之助翁
（昭和30年代初頭、田口召平氏 提供）

今石　ありがとうございます。実際、イタヤは馬っこの飾り物があったり、もともと葛籠（つづら）も作っていたということで、こういったちいさな箱なんかも作ってらっしゃいますね。

現代の生活の中にこうした箕づくりの技術をどのように定着させていくかということですが、今日は、展示・販売という形で箕に関わっておられる方が会場にもいらっしゃっていますので、ぜひお話をお聞きしてヒントを得たいなと思います。2名ほど事前にお願いしていたのですが、まずお一人目は南千住の市川商店さんです。ここから歩いていける距離ですが、「暮らしの竹かご屋」というお店を営んでいらっしゃいますのでお話をいただければと思います。

市川伴武　市川商店の市川と申します。本日は素晴らしい実演をありがとうございました。一売り手の端くれとして、ちょっと違う角度になるかと思うのですが、お話ししたいと思います。弊店と箕との関わり、それから現状と今後の展望の3点について簡単にお話しさせていただきます。

弊店は東京の荒川区南千住というところにございまして、箕に関しては、記録にあるところだけで言いますと、実用的な藤箕の需要から始まって、サイズはほとんど一斗サイズを扱っています。弊店の近くに浅草のかっぱ橋という調理道具や菓子道具を扱う道具屋街がありまして、そこから主に頼まれて納品をしています。これは卸売の形です。使い方としては主に、小豆の選別や穀物の選別でお店が使われるということです。またそのほか、わたしどもの店舗ではお米屋さん、豆屋さん、製菓屋さん、粉屋さん、そういった多様なお客さまに販売してまいりました。

現状ですが、みなさんご承知の通り、藤箕の生産や私どもの店への入荷も、時代とともに極端に減っています。お客さまは引き続き業務用で使っている方が多いですから、その需要に応えるべく代替品を探したり、いろいろと駆け回っておりまして、そのうちに私たちも箕の造りの美しさや実用性の高さに魅力を感じまして、作り手の減少が大変に危惧されている現実から、籠や笊と同様に、熱を入れて箕という編組品を集めるようになってきました。箕を作ってらっしゃる職人さんを全国に訪ねておりまして、現在は富山県の氷見の箕、長野県の戸隠の箕、宮城県大和町の箕ですとか、もちろん田口さん

店内の様子
（暮らしの竹かご屋 市川商店
東京都荒川区南千住2丁目28－8）

の箕や千葉の木積のみなさんの箕もそうですね。一戸のサルナシの箕（面岸箕）、新潟県阿賀町のメッカイ、香川県讃岐の竹箕などを販売しております。

ここからは今後の展望になるのですが、これだけ箕を集めておいてどのぐらい売れるのかと言いますと、先代の父の代の記録でも年間70枚程度かなと。そこからは減る一方で、現在では色々な箕を合わせても年間30枚程度です。なかなか商売ベースに持っていくのが難しいというのは実感しているのですが、私どもとしましては、今まで需要があった業務用で使ってらっしゃる方々に、引き続き良い箕を提供することに尽力すること、健全な編組品である箕がまだ全国にありますので、そういったものを新しいお客さまにご紹介することに力を入れていければと思っています。私たちができることとしては、作り手のみなさんの支援と、今までの需要に応えるということと、また新しい需要を作り続けること、この3点をしていかなければいけないと思っています。

その手段としては、やはりインターネットが普及していますので、私どもは店舗そしてインターネットで販売しております。そういったところで売れるのはやはり小さい箕なんですね。みなさん家庭内で野菜や果物を入れたいとか、ちょっとした家庭菜園の収穫で使いたいということで買われる方が多いです。ですからサイズでいいますと、1升～5升ぐらいのサイズですね。業務用の方は1斗～1斗5升になってくるのですが。ですからお客さまも農家の仕事で使われるというよりは、一般の女性の方が多いです。いま、私どもの店のお客さまでいいますと、20代後半～80代ぐらいまでの女性が圧倒的に多いのですが、最近は男性のお客さまも増えてきています。

この方々はもともとの箕の使い方を知らないことが多いです。ですからそういった方々に本来の使い方を教えると同時に、新しい使い方を提案しなくてはならないと思っています。普通のお客様は籠や笊と同様に、箕という編んだものに大変興味があることは確かだと感じています。ただやはり使い方がわからないとか、同じ用途、たとえば果物を入れるにしても、箕よりも籠の方が手間の分、材料の種類の分、安かったりするんですね。そういったところは難しいのですが、ただ値段とは別のところで訴えられるところもあるのかなと思っております。

また2点目は、私たちは問屋として卸売もしますの

店内に並べられたさまざまな編組品
編組品はとくに地域性が色濃く出るという
（市川商店）

で、私どものお店だけではなくて、全国の雑貨店や百貨店に宣伝をして扱ってもらうことで、箕というものをもう一度みなさんに再認識してもらうことが大切かと思っています。

そして最後は田口さんもおっしゃっていましたが、箕の使い方や技術の応用の部分を支援していくことも大切かなと思っています。宮城県大和（たいわ）町では、昔から作っている箕の技術を応用して籠を作っていますが、その籠を弊店でも扱っています。やはりみなさん、新鮮なようです。というのは、竹と桜の皮が入っていたり、フジの皮が入っていたりすることで、ほかの竹だけで作った籠とは全然違う存在感がありますので、そういった作りの丁寧さですとか力強さには一定の評価があると思っています。私どもも、本音としてはもっと箕を売りたいのですが、そういった技術を応用して籠を作ることも、技術を繋ぐひとつの有用な方法かと思いまして、今後も支援を続けていきたいと思っております。一売り手としてコメントをさせていただきました。

今石　ありがとうございます。続きまして国立市にあるカゴアミドリさんで、日本や世界の籠を販売されている伊藤征一郎さんです。籠のお話で箕とはちょっと違うのですが、面白い取り組みをされていますので、ご紹介いただければと思います。

伊藤征一郎　東京の西部、多摩地区の国立という街で、「カゴアミドリ」という名の小売店を営んでおります伊藤と申します。よろしくお願いいたします。

当店は籠の専門店ということで箕とは大きく状況が異なるかと思うのですが、全国各地の伝統的な籠づくりも、作り手さんの高齢化や後継者不足など、年々状況が厳しくなっている点で、共通の悩みを抱えていると思っています。当店では、常に箕を取り扱っている訳ではありませんが、私自身も本日来られている3つの産地に、実際に足を運ばせていただき、現在の状況について存じておりました。

本日は時間が限られていますので、最近当店が意識して取り組んでいることの2点について紹介したいと考えています。

ひとつは、籠についても、本来の道具として、元々あった用途をしっかり伝えることを大事にしています。できるだけ元々の形のまま販売できるかどうかを第一に考えますが、今の暮らしでは使いにくい場合などは作り手さんに相談をし、サイズやかたち

店内の様子
（カゴアミドリ 東京都国立市西 2丁目19－2 第一 村上ビル2階）

など多少アレンジしてもらうことを行っています。

2つ目は、店内で販売のための陳列をするだけではなく、写真や動画などを使って、籠が生みだされるまでの工程を、できるだけお客さまに見ていただくことを心がけています。

このことで何ができるかと言いますと、今の自分の暮らしに必要か不必要かという選択肢以外の関心を引き出すことができ、率直なご意見を聞けるきっかけ作りができるのではないかと考えています。

この2点を、写真を使って説明させていただきます。いま映っているのが当店の店内ですが、各地のさまざまな素材や、異なる価格帯の籠が一同に並んでいるような店になっています。箕など、多くの背景を伝えたい製品についてはただ飾るのではなく、できるだけ関心を持ってもらうようなディスプレイを心がけています。

これは企画展の写真です（割愛）。当店ではひと月に1度程度、テーマを絞った企画展をやっています。これは秋田のアケビツル職人の方の作品展の写真です。イベントを行う前は、なるべく一年くらいの時間をかけて、季節ごとに職人さんを追って現地で取材しています。これはアケビのツルを採集しているところで、ちょうど2週間前、10月末に取材に行った時の写真です。

イベントではできるだけ作り手さんを直接招いたトークイベントもやっておりまして、ものを作る過程だけではなくて、その方のお人柄や仕事への向き合い方など、直接お客さまに聞いていただける機会を設けています。

これは沖縄の籠で、材料のアダンという葉を採っている写真です。この材料を採っている動画を店内で上映して、その前に作品を並べる、そういった展示をしています。

これは日本最西端の島、与那国島にいった時のものですが、クバという葉を使った「ウブル」という名でよばれている水汲みです。もちろん現在は水道のある生活をされているので、これを使って暮らしている方はいらっしゃらないのですが、主にお土産品として多少流通しているような現状だと思います。

これは、クバの葉を実際に畑で採取しているところですが、こういった写真をお見せしたり、実際に古くから使われてきた水場で、ウブルを使って水を汲んでみるという動画を流したり。こういったことで、たくさんの方が興味を持ってくれました。

現地での取材の様子
（アケビツルの採取）

これは作り手さんを招いて「ウブル」をつくるワークショップをやっているところです。小学生のお子さんも含め、幅広い年齢の方々に参加していただきました。これは当日参加した参加者の方が作られた作品です。

こちらの写真は、少し形をアレンジしたウブルです。本来の形は全体がコロンとしていて安定感に欠けますが、お客さまが壁掛けとして物入れにしたらどうかということで、その意見を取り入れてオリジナル品として作っていただいたものになります。

これらのように、いまの暮らしに取り込めそうな少しの工夫をすることで、これまで飾りやインテリアとして買われていた民具が、家庭内の道具として実際に使っていただけるきっかけになるのではないかと思います。

古くから使われてきたオリジナルの道具をつくる技術を残すために、時代にあわせて多少応用したものを作るというのも、ひとつの手段になるのではないのかなと考えます。

このスライドが最後になります。こちらは本日お越しになられている富山県氷見の坂口さんに作っていただいたもの、苦労して籠型に制作いただいたものです。これは試作品ということでまだ販売できる状態ではないのですが、レジでお会計の際とかにちょっと見てもらって、お客様とのコミュニケーションをはかる、お客さまの声を聞きだす、そういう仕掛けづくりをお店の中でおこなったりしています。

籠もいまの暮らしには決して必要不可欠ではないと思うのですが、かといって無くなってしまっていいのかと考えたときに、将来、ひょっとして石油も電気も使えない時代がきたときに、まったくものづくりの技術がないというのは、とても残念なことに思います。

先人たちの知恵と技術が詰まった手仕事の道具が、今後も残り続けていけるよう、籠を売る店としてできることをこのような形で模索していきたいなと考えています。

今石　ありがとうございました。いくつか共通して出てきたことがあると思います。もともとの用途をきちんとお伝えした上で現代風のアレンジを加えていくですとか、工程をきちんと見せることで、モノに対して、モノ以上の価値、物語をつけていくことで価値を高めるということ、あるいは関心のある

伝統的なウブル（右）と
現代風にアレンジしたウブル

層をいかに広げていくかという点で、非常に面白い取り組みをされているというご紹介でした。

残念ながら、残りの時間があと4分になってしまいました。ご質問のある方、ご発言したい方、いらっしゃると思うのですが、ぜひこの後の情報交換会でお話しいただければと思います。最後にお三方に今日のお話を受けて、一言ずつお願いしたいと思います。

行木　今日の箕づくりサミットを機に、箕がもう一度見直されるようにと願っております。みなさま、どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

小谷　ありがとうございます。作り手の高齢化という話もありますので、とにかく、いま制作されていらっしゃるみなさまの健康を一番に願いまして、終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

箕づくりと差別をめぐって

田口　わたくし、失礼ながら切り口の変わった話をさせていただきます。お二方のほうで、仕事をなさっている方々が差別の対象になったというお話は聞いておりませんでしょうか。

私も商売方々、秋田県はもちろん、山形、青森、岩手など東北各地の箕づくり集落を全部まわってみました。しかもたった一回だけでないです。2回、3回とまわりました。ところが東北ではひとつもそんな話は聞かなかった。ただ一ヶ所、宮城県の黒川の箕（大和町宮床）、そこの浅野サツさんという方が栃木県出身で、その親御さんたちが宮城に訪ねてこられたとき、はじめて家の稼業を隠しましたと、たったそれだけ聞きました。なるほどここでは差別の問題があるんだということを知りました。

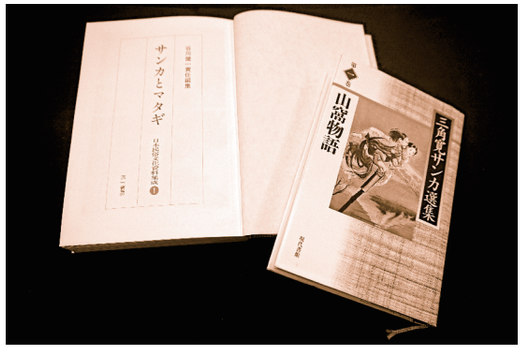
ところが平成8年に埼玉の毛呂山町にお世話になりまして、あそこは何故か三角寛先生（1903～1971）が晩年を過ごされた地域なんです。そして今日も来ていらっしゃる平良宣子先生（毛呂山町歴史民俗資料館）にその話をちょっとしましたら、三一書房から出ている『サンカとマタギ』（1989）という本があるから読んでみたら、と言われました。それを私は3回も4回も読んでみて、とっても悲しいかな、こんなことが日本列島にあるんだと。しかも民俗学をたてた柳田國男先生が筆頭に書いているのです。喜田貞吉先生もそうです。後藤興善先生もそ

箕をアレンジした籠
（論田・熊無の箕の作り手である
坂口さん製作）

のとおり。そんななかで能田多代子先生だけがひとり、青森にある世増集落について書いている。世増は箕作りの村ですが、この論文だけは正しいと、私は理解しております。

ところが先ほどお話をしましたお三方の研究論文をみて、みなさんがた、納得していますか？ 私の理解では西の文化が東北を全部制覇したなと。その基本的なものが三角寛先生なんです。柳田國男先生も三角先生のサンカ小説が出たことに触発されて、「『イタカ』及び『サンカ』」の文章も書いております。そして明治26年以降、サンカに関心を持ってきたという大垣警察署の広瀬寿太郎さんから聞いた話といって、未解決の事件をサンカ集団の仕業として濡れ衣を着せて仕立てあげます。またいろんな山から煙が出て、あそこで箕づくりがやっているなと。山のなかに洞穴がいくつもあって、そこから煙が出たと、その煙を見ただけで、サンカとセットにしているんです。京都でも、若王子山から煙が出て、「あ、あそこにまた今年もまわって来たな」という記述から、2～3日したら箕直しの人が来たと、それで私の話は合っているでしょうと〔柳田國男「山の人生」〕。こういう柳田先生の考えなんです。

そしてその文章の綴りの中に、先ほどお話ししました警察署の話があります。明治時代の警察署というのは、失礼ながら、今では想像のつかないぐらい国家権力というものが強かったんです。そして解決できない問題を、警察署の署長の指示で、名もない貧しい人たちに転嫁しているんです。みなさん大分県の的ヶ浜事件（1922年）って知っているでしょう？ 警察署がその集落をわざと焼き討ちするんです。そのぐらい国家権力が強い時代のことを、柳田先生は立派な本の中にちゃんと書いております。そして極言すれば、私の様な人は「非人」と書いてあります。人に非ず、です。私も親がいます。その先代もおります。そういう人たちを民俗学者の世界では非人といっています。このことは、私たちの地域に限定されたものではなく、全国津々浦々の箕に携わった人々をも指しているのです。私はこのことについて、50年も悩んできました。今日ようやく、その一端だけをみなさまに申しあげたいと思って、今日、特に力をいれて勉強をしてまいりました。民俗学に属していらっしゃる先生方が、今日はたくさんおられます。しかも箕や竹細工に関心のある方が大半だと思います。先生方には、あの柳田國男先



『サンカとマタギ』（三一書房 1989）と『三角寛サンカ選集』（全7巻のうちの第1巻 現代書館 2000）

生の文章をもう一回、現代風に検証していただきたい。民俗学の世界で種をまいたものは、民俗学のみなさんで収穫してもらわなければならないものなんです。そして現代の感覚で、目線で、それをきちんと検証していただきたい。これが私の本当の願いです。

学ぶということは、人間同士が仲良く生きるために学ぶのだと思うんです。つまり人と喧嘩することじゃなくて、差別も何もない平和な世の中を作るために学ぶことが必要と思います。そんなことを今までずっと考えておりましたので、ひとつよろしくお願いいたします。

榎美香（千葉県立関宿城博物館）　千葉県の県立博物館の榎と申します。いま田口さんがおっしゃったことですが、箕の研究や文化財の指定という動きが始まったのは非常に新しく、ここ10～15年といったところです。それまで、こんなに素晴らしい技術があまり取りあげられてこなかったことの原因のひとつが、田口さんがおっしゃってくださったサンカ研究との関わりというものがずっと引っかかっていて、研究者の方も手をつけられないようなところがあったかと思います。私も千葉ですので最初に木積でお世話になって、たしか〔伝承者の〕古山さんにお話をお伺いしたときに、たしかにサンカの方はいらっしゃって、箕を作ったり直したりということで生計をたてておられた方はいると。木積でも広範囲に行商に行くときには、最初にサンカの方のおうちを訪ねて挨拶をして、仁義を切ってからその場所に行商に入るんだというようなことを伺いました。たしかにサンカの方もいらしたし、それとは別に箕の産地で作っておられた方もいた。それは一緒にしてはいけないし、それぞれ研究があるべきだと思います。私もその後、北陸のほうを回って箕づくりの方々にお話を伺いましたけれども、そういう差別的なお話というのは、ほとんどもう、全然、聞かなかった。あえて聞いてみたりもしたのですが、「いや、聞いたことないね、そんなことあるの？」という感じで、もしかしたら西日本の状況とは違うのかもしれませんが、少なくとも東日本ではあまりなかった。逆に感じたのは、箕を作る材料は山に入って自分で採ってこられる。元手がなくてもそれを製品にして里にもっていけば現金収入になるということで、どこの産地も水田耕作の耕作面積が少ないような地域で、現金収入を得る副業として成り立っていくとい

う共通の特徴がありました。ですから箕づくり＝差別的なものということではなく、現金収入を得るための手段として、いろいろな選択肢があるなかで一番収入が得やすい、山の中の材料で作れるものとして箕があるのかなとそういうふうに感じました。今後、これをきっかけに研究が進んで、その点も目を背けずにきちんと検証できたらいいなと思います。

今石　ありがとうございました。ものづくりはどうしても差別という問題と近いところにあるということだと思います。

大前提として、差別の概念というのが歴史的に作られたものであるということ、これはもう言うまでもないことです。ただ、それによって日本社会全体が振り回されてきたり、苦しめられてきた人がいたということも、あわせて覚えておかなければならないと思います。

三角寛が大正～昭和にかけてサンカ小説をたくさん発表するわけですが、1970年代以降、再検証がなされまして、そのほとんどが彼のフィクションだと、創作だということで、研究資料としては現在は認められていないですね。しかし、その後、我々研究者がそれをきちんと精査してきたかというと、そうではないところがあると思います。

いま、榎さんからお話がありましたが、日本列島を通じて、決して状況は一様ではないと思います。北東北や南九州では差別の概念が希薄だったと言われていますし、いま西日本の話が出ましたが、西日本の箕を研究されている森本仙介さん（奈良県教育委員会）によると、西日本でも本当に村によって状況が違うのだそうです。ですからそれを十把一絡げに、箕づくり＝サンカというような言説を流布するままにしてきた、それは私たち研究者の責任だと思っています。実はいま、箕を研究したいという研究者が集まって研究会を始めようということも話しておりますので、その中でもぜひしっかりと追究していきたいなと思っております。

それでは、これにてパネルディスカッションはおしまいにしたいと思います。なかなかまとまりませんでしたが、さまざま課題を出していただき、取り組みもご紹介いただきました。これからみなさまの間で交流していただいて、知恵を出し合って全体がよい方向に進んでいければと思っております。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

参加者のみなさま

秋葉 千枝子	木積箕づくり保存会
安部 智穂	南部桶柾（岩手県宮古市）
猪狩 真理子	御所野縄文博物館
石井 和彦	映像作家
石井 和帆	栃木県立博物館
石井 勝利	福島県小野町
市川 彩	籠祖神講会員 市川商店
市川 伴武	籠祖神講会員 市川商店
伊藤 征一郎	カゴアミドリ
稲垣 尚友	竹カゴ屋
伊橋 おさみ	木積箕づくり保存会
上田 啓未	合同会社AMANE
榎 美香	千葉県立関宿城博物館
江波戸 良子	木積箕づくり保存会
江村 陽子	
大橋 正芳	手仕事フォーラム
大山 孝正	福島県文化財センター白河館
奥畑 正宏	南部桶柾（岩手県宮古市）

小倉	木積箕づくり保存会
小谷 超	氷見市教育委員会
柿沼 梨沙	福島県文化財センター白河館
香取 文雄	木積箕づくり保存会
金杉 光恵	木積箕づくり保存会
上出 篤美	論田・熊無藤箕づくり技術保存会
神野 知恵	東京文化財研究所（客員研究員）
神野 善治	武蔵野美術大学
川野 和昭	南方民俗文化研究所
北向 進	論田・熊無藤箕づくり技術保存会
國井 秀紀	福島県文化財センター白河館
久野 雅晃	コウ写真工房
久野 太朗	コウ写真工房
久保 光徳	千葉大学大学院工学研究院
坂口 忠範	論田・熊無藤箕づくり技術保存会
佐久間 雅也	農業
佐々木 長生	福島県会津若松市
篠崎 茂雄	栃木県立博物館

篠原 正	木積箕づくり保存会
鈴木 光治	木積箕づくり保存会
鈴木 信行	木積箕づくり保存会
勢司 恵美	竹細工職人
関田 徹也	籠屋
宋奇泰	韓国・木浦大学島嶼文化研究所
平良 宣子	毛呂山町歴史民俗資料館
髙木 きぬ	木積箕づくり保存会
髙橋 真央	千葉大学工学部デザイン学科
高宮 紀子	
田口 静子	太平箕（秋田県秋田市）
田口 召平	太平箕（秋田県秋田市）
陳 誼菲	千葉大学工学部デザイン学科
辻村 一朗	籠祖神社奉賛会
土屋 幸雄	木積箕づくり保存会
峠 有香	御所野縄文博物館
長井 亜弓	国際常民文化研究機構
中田 貴彦	秋田魁新報社 東京支社

鍋田 尚子	神奈川大学大学院
西嶋 美那子	竹籠関係
延原 有紀	面岸箕（岩手県一戸町）
野山 清治	木積箕づくり保存会
橋口 博幸	竹文化研究家（愛竹家）
飛田和 正吉	木積箕づくり保存会
平間 尭明	福島県文化財センター白河館
平山 勝巳	木積箕づくり保存会
藤田 邦彦	東京都杉並区
船川 朗博	
古川 葉子	彫刻家
堀井 洋	合同会社AMANE
堀井 美里	合同会社AMANE
堀 恵栄子	gallery KEIAN
本間 一恵	バスケタリーニュース
水野 芳夫	木積箕づくり保存会
森本 仙介	奈良県教育委員会
山田 昌久	首都大学東京
山本 あまよかしむ	みちくさ庵
行木 光一	木積箕づくり保存会
渡辺 大介	手仕事フォーラム

飯島 満	東京文化財研究所
石村 智	東京文化財研究所
伊藤 純	東京文化財研究所
今石 みぎわ	東京文化財研究所
小田原 直也	東京文化財研究所
亀井 伸雄	東京文化財研究所長
狩野 萌	東京文化財研究所
菊池 健策	東京文化財研究所
菊池 理予	東京文化財研究所
久保田 裕道	東京文化財研究所
佐野 真規	東京文化財研究所
橋本 かおる	東京文化財研究所
半戸 文	東京文化財研究所
前原 恵美	東京文化財研究所
山川 志典	東京文化財研究所

箕

箕サミット２０１７の記録

２０１８年３月 発行

発行
独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所
〒一一〇―八七一三 東京都台東区上野公園一三―四三
電話 〇三―三八二三―四九二七

印刷・製本
株式会社 松本文信堂

責任編集
今石みぎわ（東京文化財研究所 無形文化遺産部）

デザイン
小池俊起

制作協力
岩澤佑史
岸本誠司
コウ写真工房
世界のかご カゴアミドリ
氷見市教育委員会

東京文化財研究所